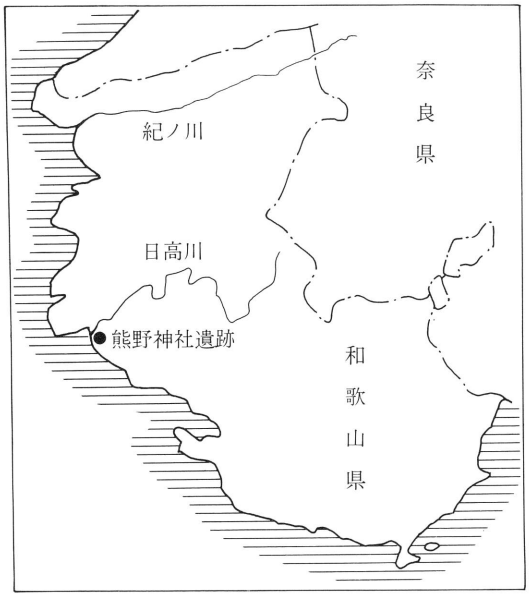
和歌山県御坊市

# 岩内古墳群ほか発掘調査概報

## 熊野（いや）神社遺跡の調査




1988.3

和歌山県教育委員会

# 序

和歌山県中部の御坊市は、県下第二の面積を持つ日高平野の一画を占め、多くの文化財が存在しております。

和歌山県教育委員会では、昭和60年度から市南部の岩内・熊野地区において、広域営農団地農道整備事業計画に伴い岩内古墳群等の保存資料作成のため発掘調査を実施してまいりました。

本年度は、熊野神社遺跡について調査を行い、中世の掘立柱建物や類例の乏しい竪穴式建物を発見することが出来ました。

ここに発掘調査の概要報告書を刊行します。本書が県民の皆様のみならず、研究者の方々の御参考になれば幸いと存じます。

最後に、この調査を実施するにあたり、御協力をいただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げるとともに、埋蔵文化財保護行政に、より一層の御支援を賜わりますようお願い申し上げる次第です。

昭和63年３月31日

和歌山県教育委員会

教育長　高 垣 修 三

# 例　　言

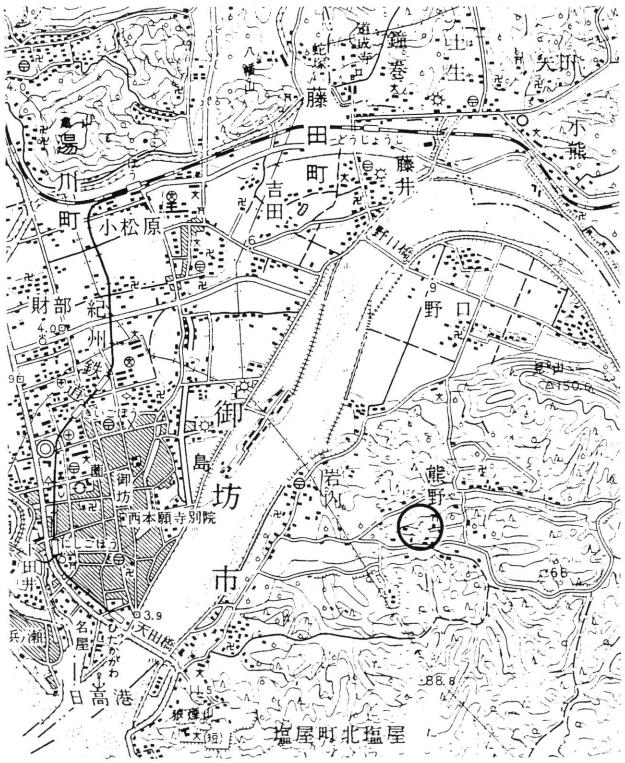
1　本書は、岩内古墳群ほか発掘調査事業の一環として行われた御坊市熊野に所在する熊野神社遺跡の発掘調査概要である。

2　この調査は、広域営農団地農道整備事業に伴うもので、文化庁より文化財保存事業補助金の交付を受け、遺跡の保存資料作成を目的として実施した。

3　発掘調査は、和歌山県教育委員会の指導のもとに財団法人和歌山県文化財センターが実施した。調査期間は1987年12月９日から1988年３月25日までである。現地調査は文化財センター主査（兼教育庁文化財課技師）山本高照が担当した。

4　本書の執筆・編集は山本が担当した。執筆にあたり、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部の大脇潔氏より種々御教示頂いた。

5　本書に掲載した実測図の方位はすべて磁北である。当地域の磁針方位は1980年現在で、西に約６度10分偏している。



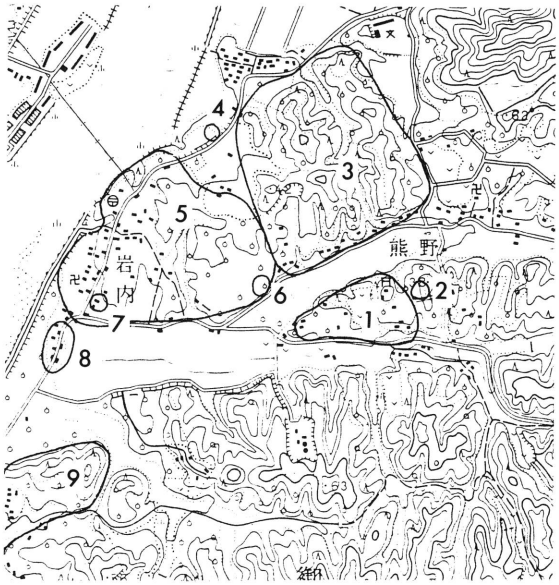

第１図　熊野神社遺跡位置図　1/50,000

# 熊野神社遺跡発掘調査概要

**位置と環境**　南北に長い和歌山県の中部に日高平野がある。平野は日高川下流域と、いくつかの支流沿いに展開するもので、紀ノ川下流の和歌山平野に次ぐ規模を有す。平野とその周辺の段丘や丘陵上には数多くの遺跡が存在する。

熊野神社遺跡は、日高川の支流である熊野川南岸の丘陵上に立地している。南北を侵食谷に狭まれた比較的起伏の小さな丘陵である。丘陵上の調査地からは西に日高川の流れや「煙樹ケ浜」の海岸線を、西北には岩内の丘陵越しはるかに、中世において有田・日高郡で勢力を誇った湯川氏の本城亀山城を望むことが出来る（第１図）。

熊野神社遺跡の東には「村民一寸余の白玉二ツ鏡二面大刀長刀器物等を掘出したることあり」と『紀伊続風土記』に記載される熊野１号墳が所在する。また熊野川を狭んで北側の丘陵には、古墳時代初頭と奈良時代の集落跡である岩内Ⅱ遺跡や奈良時代と中世の集落跡岩内Ⅰ遺跡、中世の野口城跡・岩内館跡等が所在する（第２図）。



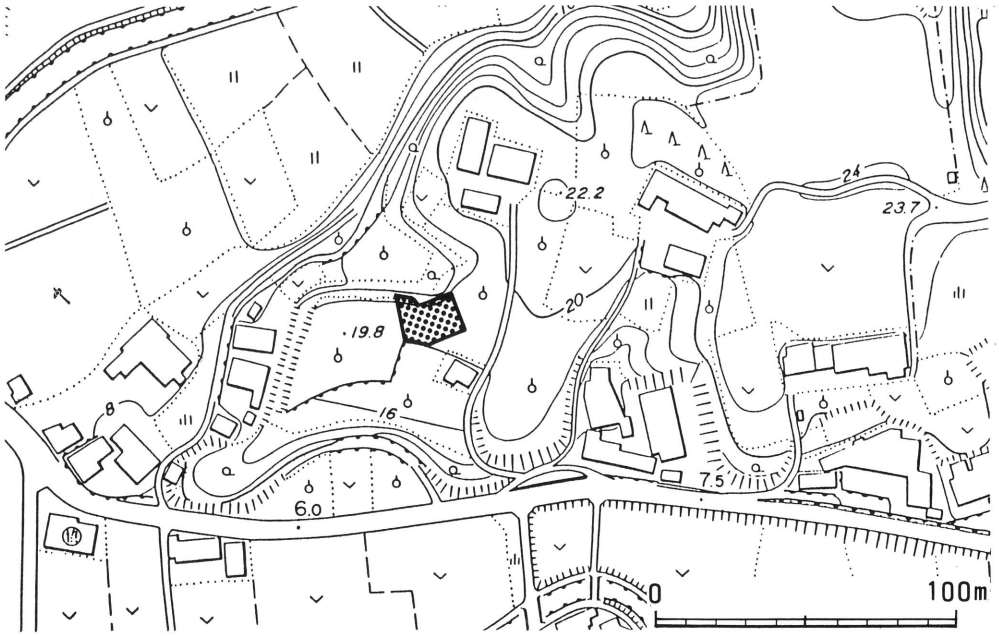

第２図　周辺の遺跡　1/25,000

| | | |
|---|---|---|
| １熊野神社遺跡 | ２熊野１号墳 | ３岩内Ⅱ遺跡 |
| ４岩内墳墓 | ５岩内古墳群･岩内Ⅰ遺跡 | ６野口城跡 |
| ７岩内王子社跡 | ８岩内館跡 | ９天田古墳群 |

**調査の経過**　広域営農団地農道整備事業を和歌山県農林水産部が計画した。ところが、農道が通る御坊市岩内・熊野地区の丘陵上には、岩内古墳群、岩内Ⅱ遺跡、熊野神社遺跡が所在するので、和歌山県教育委員会では、文化庁より文化財保存事業補助金の交付を受けて、当該遺跡の保存資料を作成するため発掘調査を実施することになった。

本年度は、これら３遺跡のうち熊野神社遺跡について発掘調査を実施した。

第３図　調査地遠景　北から



第４図　発掘区位置図　1/2,500

**調査**　調査地は、熊野神社の西方 250 m の丘陵西端部である。南と北から谷が入り込み丘陵の幅が狭まった地点にあたる。丘陵上面の標高は18m、沖積地との比高はおよそ12mある（第３・４図）。

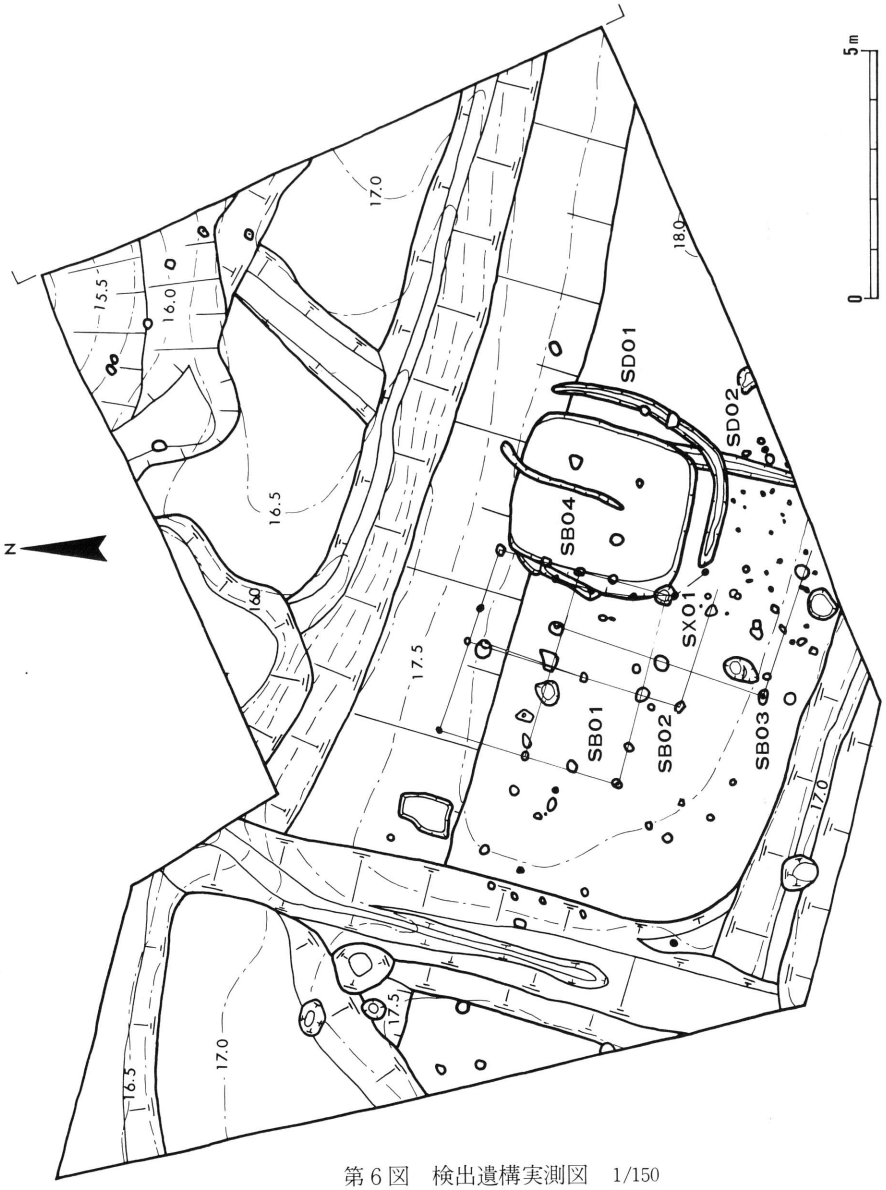
調査は丘陵上面から北側斜面にかけて東西20m、南北15mの不整形な発掘区を設定して実施した。

発掘区は調査前、畑となっていた。耕作土を除去するとすぐに地山で、わずかに発掘区の東北隅で堆積層が残存していた（第７図）。この堆積層は３層に分かれる。上から暗茶褐色土、黒褐色土、黄茶褐色土の順である。上層と中層からは古墳時代後期と中世の土器が出土した。下層からは遺物が出土しなかった。丘陵上面の地山は黄褐色粘質土で、標高17.2m以下は岩盤である。遺構はすべて地山面で検出された。

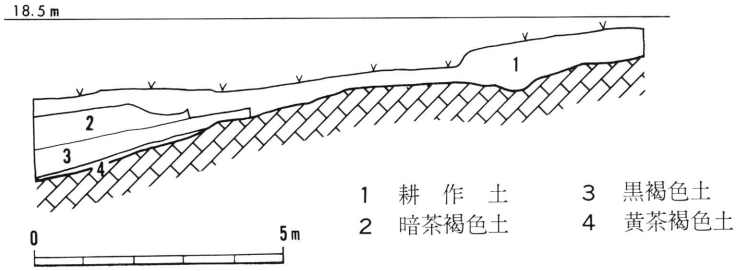
第５図　発掘区全景　北東から

**遺構**（第５・６・８～10図）

検出したおもな遺構は、掘立柱建物３、竪穴式建物１、ピット列１、溝２である。これらはいずれ




第６図　検出遺構実測図　1/150




第７図　発掘区東壁土層図　1/150

第８図　掘立柱建物ＳＢ01～03・竪穴式建物ＳＢ04 西から

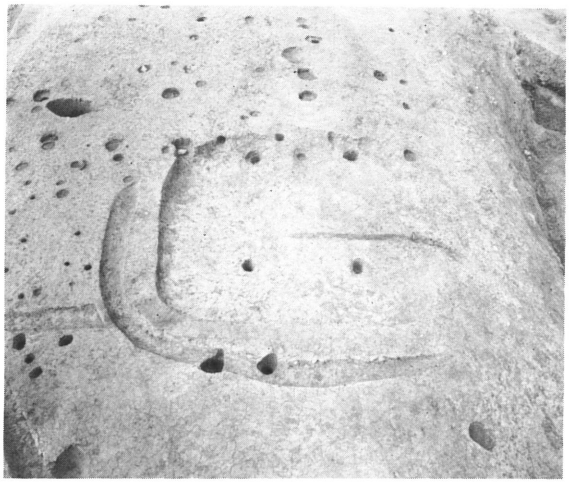
も中世に属す。

**SB01** 東西２間（3.90m）、南北２間（3.60～3.75m）の総柱建物。柱間は桁行1.95m等間、梁行は西妻柱列南の間が1.95mで、その他は1.80m等間である。柱掘方は15～25cmの楕円形だが、南東隅の柱穴は一辺35cmの方形状である。柱穴の深さは20～30cmで、底に割石や河原石を置くものがある。建物の方位は磁北に対して15度東に偏している。SB02・03・04と重複するが、このうちSB04との前後関係が明らかで、この建物の方が古い。

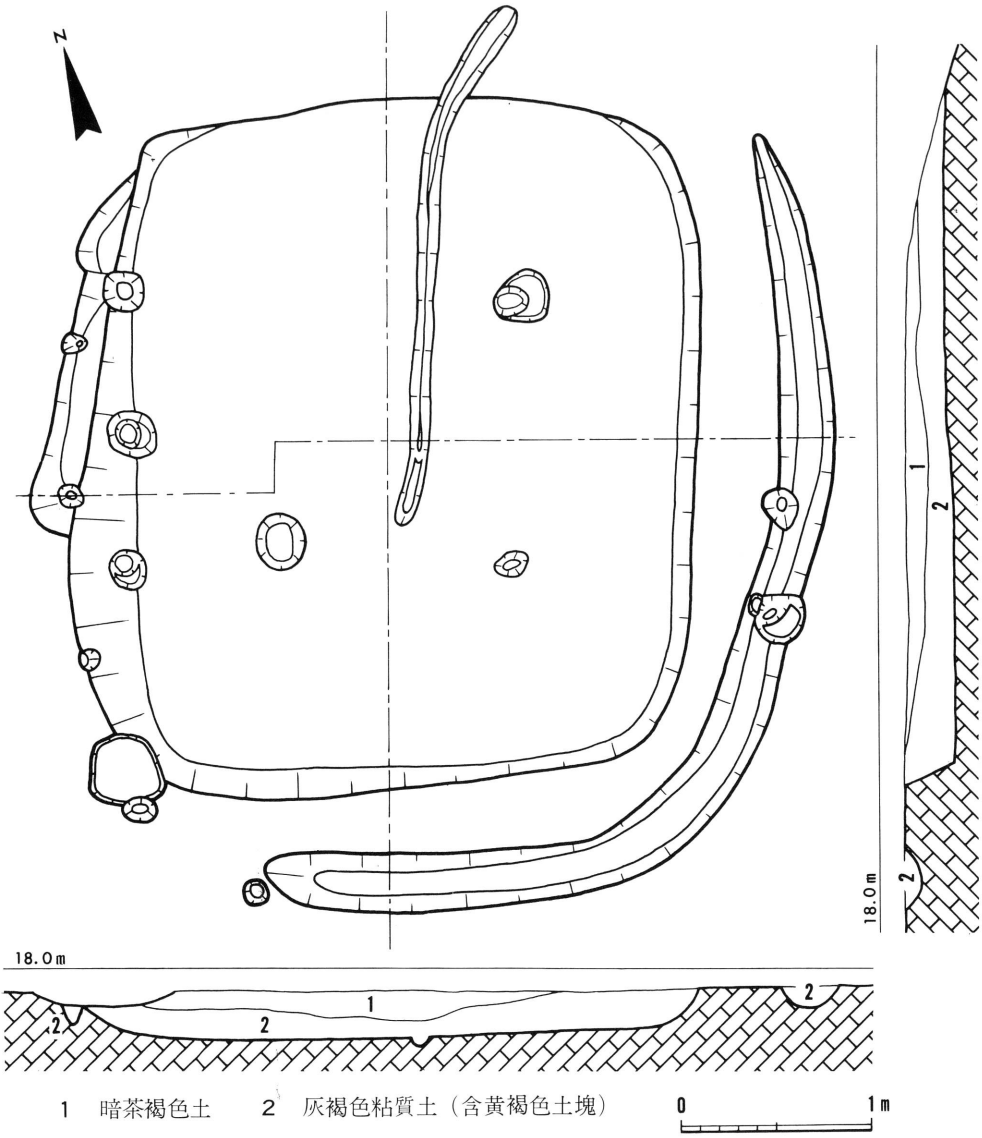
**SB02** 東西１間（2.10m）以上、南北２間（4.20m）の掘立柱建物。柱間は2.10m等間。柱掘方は径20～30cmの楕円形で、深さが20～30cmある。建物の方位はSB01よりやや東にふる。

**SB03** 東西１間（2.55m）以上、南北２間（4.50m）の掘立柱建物。南北の柱間は2.25m等間である。柱掘方は径30～35cmの楕円形で、深さが15～30cmと一定でない。柱穴には柱痕跡を残すものや、底に割石を置くものがある。建物の方位はSB02の方位にほぼ一致し、磁北より18度東に偏している。

**SB04付SD01・SX01** SB01は丘陵の北側斜面寄りにつくられた平面形が隅丸長方形の竪穴式建物である。北辺塾は斜面側のため流失している。西辺の北半上部は、同時代の土坑によって壊されている。規模は床面で東西 2.9ｍ、南北 3.5ｍある。床面はほぼ水平である。西辺壁は他の二辺に比べてゆるく立ち上がる。床面の中央やや南辺寄りの位置から、幅約10cmの溝が北に延びる。溝の先端はゆるく東に曲がりながら北辺壁の外に出る。床面に見られる５個所の柱穴のうち、SB01東妻柱の南と北に位置する２個所の柱穴と、それに対応する東辺壁寄りの２個の柱穴については、SB01との切り合い関係が不明である。建物内で火が使用された形跡



第９図　竪穴式建物ＳＢ04　東から



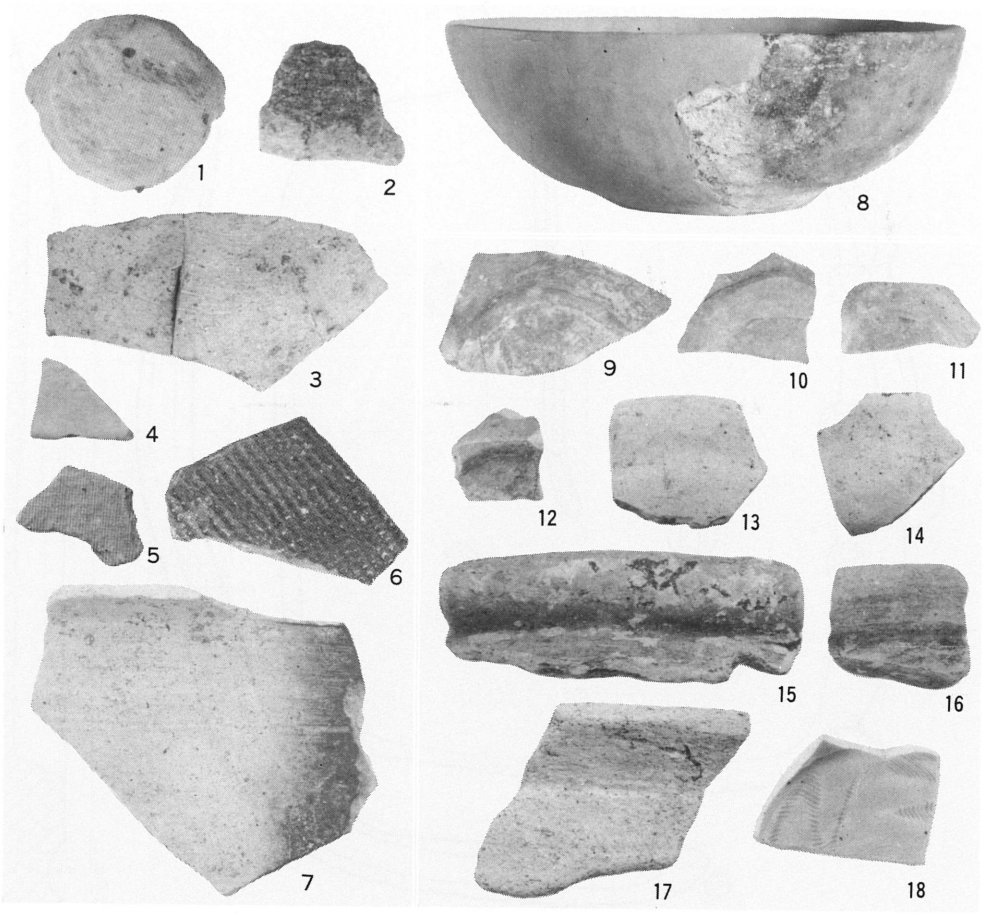

第10図　竪穴式建物SB04実測図　1/40

はない。床面から遺物は出土せず、埋土の上層と下層から中世の土器片が少量出土した。なお、埋土下層に地山の黄褐色土塊が多量に含まれることから、この建物は人為的に埋められたものと思われる。

SB01の東辺と南辺に添うかたちで溝SD01がある。幅が30cm前後あり、底はほぼ水平である。

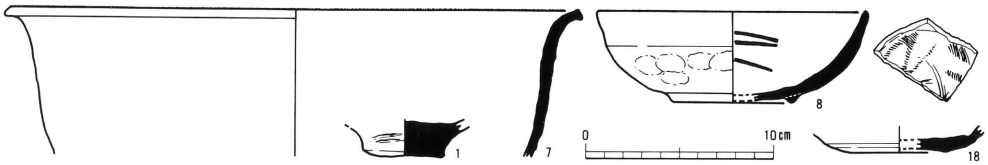
SD01の西端からSB01の西辺壁添いに、５個のピット列SX01がある。ピットは径12cm前後、深さ10～15cmある。各ピットの間隔は北から順に80・86・84・76cmである。

**SD02**　幅20～40cmを測る南北方向の溝。SB01とSD01によって切られる。底はほぼ水平。幅は南へいくに従い狭くなる。




第11図　出土土器　1/2

1・2・4・18耕作土　3・5～11東北隅堆積層　12～17SB04埋土




第12図　出土土器実測図　1/4

**遺物**（第11・12図）　すべて土器である。出土した量は少なく、しかも、ほとんどが小破片である。

1・2は弥生後期の甕の底部と体部片。外面に叩き目を施す。1は底径4.2㎝。3～6は須恵器で、杯の蓋もしくは身（3）と杯蓋の口縁部片（4）、甕体部片（5・6）である。4の端部は丸みをもっておわる。5・6の内面は同心円文を消している。7は土師器で鉢または甑と思われる。口頸部は短く外曲し、口縁端部は面をなす。内外面とも横になでて仕上げる。器壁は薄い。色調は淡褐色を呈し、胎土に細砂を含む。外面に黒斑がある。復元口径

29.7㎝。８～12は瓦器椀である。断面三角形の低い高台をもつ。８は復元口径14.2㎝、器高４.8㎝。内面の磨きは粗い。13・14は土師器皿で、色調は灰白色を呈す。15・16は土師器鍋。17は土師器羽釜。18は同安窯系青磁皿で、見込みに櫛描き電光文を施し、底部外面の釉を掻き取る。

**まとめ**　熊野神社遺跡は御坊市熊野の丘陵上に所在する。今回の調査地は丘陵西端部に位置し、南北からの谷の嵌入によって丘陵の幅が狭まった地点にあたる。

検出した遺構は、中世の掘立柱建物３・竪穴式建物１・ピット列１・溝２である。これらの遺構は、丘陵軸線に対して平行もしくは直交するかたちでつくられている。

掘立柱建物は、２間×２間程度の小規模なもので、３棟が重複する。棟方向は丘陵軸線に平行である。

竪穴式建物は、平面形が隅丸長方形で、2.9×3.5ｍの規模である。周壁外に溝とピット列を伴う。床面には谷方向に延びる細溝がある。建物内で火が使用された痕跡はない。また床面から土器は出土しなかった。[(1)]

遺物の出土量は少ないが、そのなかに弥生土器と古墳時代の須恵器・土師器が見られる。弥生土器は後期に属し、須恵器・土師器は５世紀末～６世紀初頭のものである。おそらく、両時代の小規模な集落が存在したものと思われるが、今回の調査では遺構が発見されず、また周辺の試掘調査でも確認されていない[(2)]から、中世もしくは、それ以降に削平されて消滅したものと思われる。

以上のように限られた面積の調査ではあったが、熊野神社遺跡の内容の一端を明らかにすることが出来た。岩内・熊野地区周辺は今後、開発が急速に進むことが予想されるから、遺跡の十分な保護対策が早急に講じられなければならない。

註１　中世の同様な建物は、那賀郡岩出町吉田遺跡と橋本市東家遺跡で発見されている。吉田遺跡３号住居跡は2.5×2.4ｍの方形で、床面中央に柱穴が１個あり、周壁の外に16個のピットがめぐる。林博通・辻林浩『吉田遺跡第２次調査概報』和歌山県教育委員会　1971年刊。また東家遺跡の竪穴遺構ST-6は4.0×4.5ｍの規模で、床面の南西隅に長方形の土坑があり、炉ないしカマドの可能性が指摘されている。土井孝之『東家遺跡発掘調査概報』橋本市教育委員会　1984年刊。

註２　久貝健・川崎雅史『岩内古墳群他埋蔵文化財発掘調査概報』御坊市遺跡調査会　1987年刊。

■ 1988年３月31日　■ 和歌山県教育委員会発行　■ 邦上印刷